

学校経営報告

府中市立矢崎小学校

校長 堀 誠 一

目指す学校 「明るいあいさつと笑顔が輝く学校」
～すべての教職員で 児童のチャレンジを応援する～

I 今年度の取組と自己評価

(I) 教育活動への取組と自己評価

① 確かな学力の定着を目指す教育活動の実践

「矢崎スタンダード(学習規律)」の徹底を全校で目指した。本校には教職1～3年次の若手教員が複数名在籍している。また、ベテラン教員も数多く在籍している。様々な経験年数の教員が所属する学校において、学年や指導者が変わっても統一した指導方法を用いることにより、児童が学習に集中して取り組むことができた。そのため、矢崎スタンダードは有効な手立てであった。1・2学期末に行った教員による自己評価(矢崎スタンダードチェックリスト)により、より徹底した実践となった。

「置き勉スタンダード」や「筆箱スタンダード」も、児童の発達段階を踏まえて全校で確立し、児童や保護者に統一した説明を行った。それにより、持ち物に関する無用な混乱は無く、学習に集中する環境を整えることができた。

算数科においては、1・2年生で指導方法工夫改善講師を含めた少人数指導授業、3～6年生では、全単元において習熟度別少人数算数を計画的に行うことにより児童の習熟に応じた指導を行うことができた。

GIGA スクール構想の下、大型ディスプレイや1人1台端末の利活用を促進してきた。低学年であっても発達段階に応じた活用の仕方が定着し、タブレット端末に触れる機会を積極的に創出してきた。今後はデジタル教科書の有効活用に向けて、実践を重ねていきたい。

朝学習(東京ベーシックドリル、e ライブラリアドバンスの活用や読書活動)・家庭学習(学年×10分)による基礎基本の定着を図る取組を行った。個別指導が必要な児童に対しては、朝学習の時間に担任だけでなく専科教員や支援員等の協力を得て取り出し授業を行い、児童の躓きを解消するための手立てを講じた。児童が意欲をもって取り組んでいたことから、有効な手立てであったと手応えを得ている。

毎月の詩の暗唱の取組は、美しい日本語に触れる機会を増やし、語彙を豊かにするうえで大変効果

的であった。繰り返し唱えることにより、児童に確かな言語感覚を身に付けさせることができたのは大きな収穫である。今後も引き続き詩の暗唱に取り組み、学校文化として根付かせたい。

授業改善推進プランの作成に当たっては、全国学力・学習状況調査の結果や本校の児童の実態を踏まえたプラン作成を意識し、実現可能な改善の具体化を図った。また、2学期末・学年末には作成した授業改善推進プランの検証を行い、その結果を学校ホームページで公開した。

令和6年度全国学力・学習状況調査の結果から、国語や算数の平均正答率の低さとともに、「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいく」割合がとても低い課題が浮き彫りになった。学校全体でこの課題を共通認識し、学習に向かう児童の意識を変えていく必要がある。

② 基本的な生活習慣と豊かな心の育成

相手にとって気持ちのよいあいさつを心掛け、感謝の気持ちをしっかりと言葉で伝えられる児童の育成を掲げて、全教職員で指導に当たった。「あいさつ運動」を1・2学期に1度ずつ計年間2回実施した結果、高学年児童が模範になり、立ち止まって・相手の目を見て相手意識をもったあいさつを交わせる児童が増えた。児童自ら「矢崎小はあいさつがきちんとできる」と自認した発言があったが、一部の児童は「自分は不十分だ」と自覚しており、更なる指導が必要であると考えた。

学年・学級経営において「温かい人間関係づくり」を念頭に置き、児童同士・児童と教師の良好な関係を構築してきた。いじめの早期発見と迅速な初期対応に資するため、児童の生活アンケートを毎月実施した。今年度より「心の健康観察」も導入し、外見からは見えづらい児童の心の状態を表出させた。いじめと思われる事案の初期対応では担任任せにせず、組織的な対応を心掛け、重大事態に発展する事案は発生しなかった。また、アンケートには否定的な項目だけでなく、友達の行動を肯定的に評価する項目も設け、それをふれあい月間の「エールウイーク」の機会に全校朝会で紹介することによって、児童の自己肯定感を高めた。来年度以降も続けていきたい取組の一つである。

不登校児童に対しては、定期的に校内委員会を開いて学校全体で組織的かつ具体的に対応した。サポートルームの運営体制を整え、条件整備し、教室に足が向かない児童の居場所作りに努めた。年間30日以上欠席児童は15人に上った。登校が困難な児童に対しても、サポートルームの受け入れについて保護者と確認するとともにバーチャル・ラーニング・プラットフォームの利用を開始するなど、学校との繋がりを欠かさなかった。この結果、年度末現在不登校児童全員に対して学校との接点を維持し続けている。

道徳科の授業では学年間交換授業・ローテーション授業を積極的に推進した。教材研究の充実を図るとともに、児童理解を深めることができた。学校公開の道徳授業地区公開講座では、全学年で「郷土府中に根ざした道徳資料集」の内容を扱い、地域社会が一体となった道徳教育を推進した。また、いじめ防止の授業を計画通り年間3回実施することができた。

交通安全教室・セーフティ教室・水害を想定した避難訓練などを予定通り実施し、安全教育を充実させるとともに、PTAの協力を得て防災教育を実施し、児童自身が自他の安全に配慮して行動しようとする

る意識を育てることができた。今年度より毎月初めの朝会を「安全朝会」と命名し、安全指導に特化した朝会を行った。来年度も引き続き安全朝会を行い、内容の一層の充実を図っていきたい。

たてわり班活動などの異学年交流を通して、友達と温かい関係を築き、相手を気遣う気持ちや態度を育成してきた。特に6年生は最高学年として、下級生の憧れの存在となるべく自らの行動で班を示し、年間を通じて各場面で活躍した。各学級では、配慮を要する児童に対する理解を深め、自他のよさを認め合う活動を日常的に行ってきた。

③ 健康教育の充実と健やかな体の育成

体育科の学習の授業改善を図るとともに、年間指導計画に「持久走」「府中ロープチャレンジ」の取組を位置づけ、児童に運動の楽しさを体感させ、運動の日常化を図ることができた。「府中ロープチャレンジ」の取組では、各学級で児童に目標を立てさせ、記録達成に向けて練習を繰り返した結果、多くの学級で、友達と一緒に運動する楽しさと達成感を味わわせることができた。「持久走記録会」に向けた取組では、ここ数年恒例となっている帝京大学駅伝競走部の学生を今年度も招聘し、全校児童が学生とともに走る体験を通して記録会への機運を高めた。

FC 東京スマイルキャラバン(1・2・5年)でサッカー、東芝ブレイブルーパス(3年)・サントリーサンゴリアス(校庭球技クラブ)でラグビー、読売ジャイアンツ女子チーム出前授業(4年)で野球、アルバルク東京(6年)でバスケットボール、笑顔と学びのプロジェckt(6年)で車いすラグビーと、それぞれの競技でトップ選手を招聘し、専門的な技能を習得する機会を得た。プロのコーチや現役選手から直接指導を受けることによって、運動に親しむ素地を培うことができた。

年間5回の運動朝会を新設し、体をスムーズに動かす能力を鍛える「コーディネーショントレーニング」やリズム感を養うダンスに全校で取り組んだ。また、行間体育「矢崎アクティブタイム」を年間6回実施し、教室で気軽にできる運動に親しむことができた。

毎月1回発行する「学校だより」に「家庭でできる!体力向上」のコーナーを設け、家族で取り組める運動の紹介を行った。

④ 教職員の研鑽と指導体制の確立

年間指導計画・週ごとの指導計画に基づき、常に計画・実施・評価・改善を念頭に教育活動の改善・充実に努めた。職員会議において定例校長会報告等に基づく資料を作成し、国・都・市の施策、教育動向を踏まえた校長の方針を職員に分かりやすく提示するよう心掛けた。そのことによって、全教職員の共通理解を前提とした足並みを揃えた教育活動を展開することができた。

児童の実態を踏まえた学習指導を行ってきたが、教科・内容によっては授業改善を行い、より充実した質の高い授業を展開する必要がある。今後も教員が明確な目標に向かって見通しをもった教育活動を推進したい。

学習指導要領の趣旨を生かし、児童の実態を踏まえた「授業改善推進プラン」を作成した。日々の授

業実践を通して2学期末・年度末に検証を行い、改善点を明らかにした。児童の学力向上に向けて、教職員の地道な授業力向上は、今後も課題である。

主幹教諭や学年主任を中核とした OJT を日常化し、経験年数の少ない若手教員の授業力向上や児童理解の育成を図った。また、年間を通して計画的にミニ研修を開催し、教員が学びたいニーズに合致した内容で進めることができた。

校内研究では研究推進部のリーダーシップのもと、研究教科を全学年統一の国語科に絞り、研究主題を「主体的・対話的に学ぶ児童の育成～国語科（書くこと）を通して～」に設定し、研究授業に取り組み成果をあげることができた。自己申告に基づく授業観察の機会も校内研究に関連付け、学級担任は国語科で授業を行った。授業参観後は教員間で指導助言を行ったり、授業の観点を明確にしたシートを渡したりして、お互いに授業力を向上しようとする雰囲気在校内で醸成されている。さらに一歩進んで、日常的に活発に授業参観をし合い、授業力を高めようとする姿勢を形成したい。

専科教員を交えた拡大学年会を今年度も計画的に行えた。可能な限り多くの教員の目で児童を見守り、情報を共有する体制が整備された。

⑤ 開かれた学校づくりの積極的な推進

運動会・学芸発表会等の大きな行事を計画的に開催し、多くの保護者・地域の方々に来校していただいた。参観者からのアンケートでは、子供たちの成長を感じたとの声をたくさん集めることができ、概ね好評であった。また、各学期に1回以上の学校公開（授業参観）の機会を設け、日常の学校生活の様子を保護者に参観してもらうことができた。

学校だよりや保護者会、学校のホームページ等を活用して学校の教育活動や校長の経営方針を積極的に発信した。ホームページの学校ブログを活用して児童の学校生活の様子をきめ細かに紹介した。学校ブログの更新回数は延べ370回を超え、特に宿泊行事をはじめとする校外学習での児童の様子がよくわかると保護者から好評であった。

保護者を対象とした学校評価、教職員による学校評価、児童に回答させた学校アンケートをそれぞれ行った。評価項目を3者で統一したことにより、意識の相違が明らかになった。児童が「できている」と回答した項目でも保護者・教職員が「できていない」と考えている項目があり、またその反対に児童より保護者・教職員の回答が肯定的である項目が何件もあり、回答結果を教育活動に反映させていく必要を感じた。

スクール・コミュニティ協議会を年3回開催し、学校に関わっている委員に学校の近況や成果を報告するとともに、児童の地域での様子について情報を得ることができた。課題について共有することができたことも大きな成果であった。3回目の協議会では、委員が児童と給食を一緒に食べる機会を設定した。普段の学校や児童の様子を直接見ていただき、児童と触れ合う時間がもてた。

スクール・コミュニティ協議会主催事業として漢字検定と算数検定を1回ずつ行った。漢字検定は78名、算数検定は16名の受検者があった。児童の学習意欲を喚起する活動となることから次年度以降も

続けていきたい。

⑥ 「小中連携・一貫教育の充実」に向けた府中第三中学校・南町小学校との連携

第三中学校区スタンダード「み(身だしなみ)・そ(そうじ)・あ(あいさつ)・じ(時間)・じ(授業)」のもと、小・中学校9年間の「学び」と「育ち」の連続性の推進を図った。本校では授業を除く「みそあじ」のポスターを独自に作成し、児童に可視化させて徹底を促した。また、毎月の生活指導目標にも「みそあじ」を関連付けることによって児童への意識化を図った。

各教科・領域における「9年間の学びと育ち」に関する実践では、育てたい児童・生徒像を明確にして年間3回の授業公開を含めた交流を行い、小中連携の日では、授業参観後に全体会・分科会の運営を計画的に行うことができた。

(2) 重点目標(数値目標)

① 毎日の学校生活が楽しいと思える児童が90%以上

児童アンケートでは81%で目標を達成できなかったが、昨年度より3ポイント上昇した。保護者アンケートでは85%と目標値に近づいている。今年度も目指す学校像に「明るいあいさつと笑顔が輝く学校」を掲げたが、授業がよくわかって楽しい、友達といて楽しいと感じていない児童が一定数存在していることは否めない。児童にとって学校に居場所があり、楽しいと思える学校を構築していく課題が浮かび上がっている。

② 学校の授業がよくわかると思える児童85%以上

児童アンケートでは80%、保護者アンケートでは75%との回答で、どちらも目標を下回ってしまった。本校では昨年度に引き続き校内研究で国語科に教科を絞り、全学年で「書く」ことについての研究を行い、主体的・対話的に学ぶ児童の育成を目指してきた。また、算数科では全学年で少人数指導を行い、児童の実態に応じた指導を行うことで児童一人一人の躓きの解消に努めている。また、今年度から朝の時間に専科教員等による個別指導を始め、基礎基本の定着を図ってきた。

全国学力・学習状況調査の結果等を踏まえ、全教科における授業改善推進プランを作成し、授業改善に全教員で取り組んでいる。児童が「わかった」「できた」を実感できるような指導方法を確立していきたい。

③ 漢字・計算の定着率が85%以上

漢字定着率は全校平均91%、計算力の定着率は全校平均87%とどちらも目標を超える結果となった。算数の計算力に関しては、朝学習の個に応じた指導や e ライブラリの活用、家庭学習等に繰り返し取り組んだ成果の表れであると考え。今年度取り組んできた指導内容や指導体制を維持していきたい。

④ 本を読むことが好きだと思える児童80%以上

児童アンケートの結果は72%と目標に達することができなかった。しかし昨年度に比べ7ポイント上がっているため、改善の兆しを感じている。

年間3回の読書旬間を設定し、読書活動を推進している。旬間中は図書委員会児童による企画を通して読書への興味・関心を高めてきた。また、定期的に朝の時間を使って読書を行ったり、保護者や担任による読み聞かせを積極的に行ったりしてきた。

学校経営支援員として図書館担当支援員を1名配置し、学校図書館の環境整備を行っている。来年度も継続して配置し、児童が利用しやすい学校図書館の充実に努めていきたい。

⑤ 家で「10分×学年」の家庭学習をする習慣が身に付いている児童80%以上

児童へのアンケートでは75%、保護者アンケートでは61%の回答結果で、どちらも目標到達には至らなかった。タブレット端末の利便性を生かして、家庭での活用を促進している。また、発達段階に応じた家庭学習の課題を出している。家庭での学習は保護者の協力が欠かせない。今後も保護者の理解を得て、協力を要請していきたい。

⑥ 気持ちのよいあいさつができる児童90%以上

保護者アンケートでは80%と目標を下回ってしまった。児童アンケートは88%で目標到達にあと一歩及ばなかったが、年々数値が上昇している。改善傾向を前向きに捉えたい。

今年度も「あいさつ運動」の取組を年間2回行い、児童一人一人に自分のめあてをもたせて取り組んだ。相手意識をしっかりともたせてあいさつをする指導を繰り返し行った結果、相手の目を見てあいさつができる児童が増えている。また、昨年度に引き続き校外における地域の方々に対しても、きちんとしたあいさつができるように指導に力を入れた。「明るいあいさつ」は学校経営方針の最重点事項である。引き続き指導に取り組んでいく所存である。

⑦ 遊んだり相談したりする友達がいる児童90%以上

児童アンケートは90%の回答があり、目標に達した。昨年度のアンケート調査では目標を下回ってしまったため、今年度の調査は嬉しい結果になった。学校の教育活動は授業が中心であるが、数々の行事や休み時間など様々な活動が含まれている。どの活動であっても友達の存在は欠かせないと思う。学校は、それぞれの活動を通して、良好な友達関係を形成する機会となることを認識する必要がある。

本校では児童の「ふれあいアンケート(心の健康観察)」を毎月行っている。アンケートの結果をもとに、児童の抱える不安や悩みを捉え、早期に払拭することで安心して毎日の学校生活を送らせたい。

⑧ 「自分にはよいところがある」と考える児童80%以上

児童アンケートで80%と、目標を達成した。本校ではここ数年、児童の自己肯定感の低下が課題とされてきたが、目標達成は大きな向上である。また保護者アンケートでは、児童の結果を大きく上回る93%の回答を得た。⑦でも触れた「ふれあいアンケート」は、児童の善行についても調査を行い、全校朝会で、児童からのアンケートをもとに「友達のよいところ」を取り上げ、称賛する機会をつくった。今後も友達のよさや自らのよさを認め合える環境を創出するとともに、教職員からの肯定的な評価を続けていきたい。

⑨ 学校のきまりを守って行動できる児童90%以上

児童・保護者共に90%が「きまりを守って行動できている」と回答し、目標を達成している。アンケート結果によると、ほぼすべての学年の児童が、学校や学級のきまり事を守って生活していることが分かる。学校全体が落ち着いているのは、最上級生の6年生児童が下級生に対して模範となる行動を示していることが理由の一つに挙げられる。次年度以降も矢崎小のよき伝統として継承していきたい。

⑩ 自分の安全を自分で守ろうと心掛けている児童90%以上

保護者アンケートで84%と目標を下回ってしまったものの、児童アンケートでは94%の回答があり、目標を上回る結果が得られた。毎月1回の避難訓練に加え、今年度から新たに毎月1回全校での安全朝会を設けた。安全指導を組織的・計画的に行うことにより、自らの安全を守ろうとする意識を高められたのだと推察する。今後も安全朝会の取組を続け、児童の危機管理意識を更に高めていきたい。

2 次年度以降の課題と対応策

- (1) 学力の基礎基本を定着させることを目指し、朝の時間を有効活用する。また、児童の学習意欲を喚起するために個別最適な学びを進める。全教科において、楽しくわかる授業を展開し、デジタルとアナログの双方のよさを生かした授業を展開する。
- (2) 全教育活動を通して児童に思いやりのある明るい心を育む。そのために、人権尊重教育や道徳教育の一層の充実を図る。「ふれあいアンケート」を毎月実施し児童の自己肯定感を高めるとともに、いじめ・不登校等の課題に対して迅速かつ的確な対応を行う。
- (3) 児童に運動に親しむ態度の育成と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を養う。来年度は運動朝会の回数を増やし内容の充実を図る。また、学校だよりで「家庭でできる運動」を紹介することによって、保護者への啓発を行う。行間にできる体育的行事を遂行することによって、児童に基本的な動きや技能を身に付けさせる。
- (4) 自らすすんでコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるために、言語活動の充実を図るとともに、

校内研究での学習を通して、主体的・対話的に学ぶ児童の育成を目指す。また、中・高学年に外国語活動及び外国語科の専科教員を配置し、外国語活動・外国語科の授業を充実させる。

- (5) 毎月の避難訓練や府中市防災の日（引き渡し訓練）及び安全朝会を通して、自他の生命を守る能力・態度を養う。各家庭配布の防災マニュアルやスマート連絡帳でのメール配信、学校ホームページ等を活用して災害時の情報発信に努める。

3 予算の活用

① 学校経営支援員予算の活用

配当額…4,279,000円（学校経営支援2,860,000円、サポートルーム支援1,419,000円）
執行額…4,194,220円（学校経営支援2,806,110円、サポートルーム支援1,388,770円）
執行率…98.0%

〈成果〉

昨年度までの学校図書館指導補助・学習支援・生活及び特別支援教育に加え、今年度新たに理科支援員を配置した。学校図書館指導補助員は、読み聞かせ・ブックトーク・調べ学習の資料集め等、図書館運営全般に携わり読書活動の推進に貢献した。学習支援員は個別指導や少人数指導の補助として指導に当たり、指導の習熟に合わせた指導を丁寧に行った。生活及び特別支援教育支援員は、特別な支援や配慮を要する児童に寄り添い、心を落ち着かせて学級内外で学習・生活ができるよう支援を行った。その結果、児童は安心して学校生活を送っている。理科支援員の配置により、理科室の環境整備が改善した。また、実験・観察の準備・片付けも安心して任せることができたので、授業の質が一段と高まった。

今年度よりサポートルーム付きの支援員配当額措置により、サポートルームを利用する児童に安心して学習する人的な環境を整えることができた。今年度本校では8名のサポートルーム利用登録者があった。そのうち3名がほぼ毎日利用していたが、支援員が常に傍にいてことによって、集中して学習に向かうことができるようになった。

〈課題〉

大きな額の予算が配当されているため、計画的な執行を行い、無駄なく最大限有効に活用していくことが求められている。年度当初に想定しなかった児童対応が発生した際、支援員差配の計画変更を臨機応変に行っていく必要がある。

② 副校長等校務改善支援員の活用

配当額…1,812,160円

執行額…1,729,990 円

執行率…95.4%

〈成果〉

主に副校長からの指示を受けてパソコンを操作して業務に従事する支援員が2名、印刷業務等、教職員の事務処理を請け負う支援員を2名配置している。多岐に渡る業務に対し、正確かつ迅速に職務を遂行していた。副校長付きの支援員の配置によって、副校長が教員に対する人材育成や外部との折衝等に費やす時間を生み出せている。教職員にとっては、教材研究をしたり、学級事務に専念したりする時間及び児童とじっくり向き合う時間を生み出せている。

〈課題〉

副校長が校務全体に精通し、優先順位を考慮しながら教職員の事務量軽減につながるような指示を的確に出すことが欠かせない。

③ 音楽活動等振興費

報償費

配当額…112,500円

執行額…54,000円

執行率…48.0%

振興費

配当額…40,000円

執行額…33,660円

執行率…84.2%

〈成果〉

本校の特色ある教育活動の一つである和太鼓クラブに対する報償費である。和太鼓クラブは、明星学苑を会場に行われた「青少年音楽祭」と府中市立浅間中学校において開催された「太鼓の響」の二つの演奏会に出演した。和太鼓クラブは、年12回のクラブ活動の時間はもとより、平日の朝の時間や夏季休業中も活動し、発表の場では練習の成果を遺憾なく発揮している。報償費はクラブ活動等で練習する際にご指導いただいた講師への謝礼金である。講師の先生から専門的な指導を受けたことで、児童は意欲をもって練習に取り組むことができ、演奏会での達成感にもつながっている。

④ 未来へつなぐ2020レガシー委託事業

配当額…100,000円

執行額…92,840円

執行率…92.8%

〈成果〉

予算化した段階では令和6年度府中市トップチーム等連携事業で計画を組んでいたが、実施の段階では、すべてスポーツタウン振興課からの講師報償費で賄われた。そのため、東京2025デフリンピック観戦を見据え、見学の際に必要な物品や障害者理解を促進するための書籍を購入した。

⑤ 学校と家庭の連携推進事業

配当額…367,440円

執行額…141,120円

執行率…38.4%

〈成果〉

本事業を行うことで、家庭と連携しながら丁寧に児童対応をすることが可能である。

〈課題〉

今年度より学校経営支援員の予算に、サポートルーム利用児童のための予算化がされたため、執行額がそれほど上がらなかった。また、不登校児童の送迎もほぼ行わなかった。対象児童がいる場合は、児童一人一人のニーズに合わせた支援を行っていき、適切な対応方法を考えたい。